

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：84413

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2009～2013

課題番号：21242031

研究課題名(和文)大阪上町台地の総合的研究 - 東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型 -

研究課題名(英文)General study of the Uemachi upland in Osaka - one kind type of birth, growth, the reproduction of the city in the East Asia history

研究代表者

脇田 修(Wakita, Osamu)

公益財団法人大阪市博物館協会(大阪文化財研究所、大阪歴史博物館、大阪市立美術館、大阪文化財研究所・会長)

研究者番号：50027968

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 32,900,000円、(間接経費) 9,870,000円

研究成果の概要(和文)：大阪上町台地とその周辺を対象に、古環境復元と関連させ、誕生・成長・再生をくりかえす大阪の、各時代の都市形成と都市計画の実態を探求した。古環境復元では、膨大な発掘資料・文献史料などを地理情報システムに取りこんで活用し、従来にない実証的な古地図図を作成した。その結果、自然環境が、都市計画やインフラの整備と強い関連があること、難波京をはじめ、前代の都市計画が後代に利用され重畳していくようすなどが明らかになった。

本共同研究により、より実証的な大阪の都市史を描く基盤ができたと考える。

研究成果の概要(英文)：Osaka that is metropolis of Japan repeated growth and the decline, reproduction. The center of Osaka is Uemachi upland and the outskirts. There are several thousand excavation and boring data until now, and, in this area, much historical materials remain. In this collaborative investigation, we utilized GIS (geographical information system) from those data and restored the detailed paleoenvironment of each time. Then, from paleoenvironment restored to the original state, we searched the city formation of each time and the actual situation of the city planning.

As a result, we understood that the city planning of each time and the maintenance of the infrastructure had a strong relation with environment such as the topography or the vegetation. In addition, including Naniwa-Kyo (ancient city of 7-8 centuries), we understood that the city planning of former ages was succeeded for a long time in after ages.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学 日本史 地理情報システム 都市計画 大阪 上町台地 古環境 難波京

1. 研究開始当初の背景

(1) たびたび日本の歴史の主舞台になった大阪上町台地には、数千件の発掘データ・ボーリングデータや史料が集積している。GIS (地理情報システム) を活用し、この膨大なデータを使って、いかなる時代の都市形成にも大きな影響をあたえた地形などの自然環境について、実証的かつ高い精度で復元できる見通しがあった。

(2) 大阪は古代においては政治都市、中世においては宗教都市、近世以降は産業都市など、各時代で姿と性格を変えながら継続してきた。上町台地を対象にすることによって、都城や城下町等の政治都市に偏りがちであった日本の都市研究の枠にはまらない、新しい都市史の類型を提示できると考えられた。

(3) 大阪の都市史は古代後半から中世の間に断絶しているかのような認識も多かった。自然環境の復元を土台に、考古学や文献史学が協働し、誕生・成長・再生を繰り返してきた大阪の姿を一連の通史として捉えなおすことを可能とする、調査研究の蓄積ができてきた。

2. 研究の目的

(1) 大阪上町台地とその周辺を対象に、各時代の都市形成と都市計画の土台となった地形、植生などの環境を可能な限り実証的かつ詳細に復元する。

(2) それをもとに、時代の状況に応じ都市としての特徴を変化させながら継続した大阪の都市形成、都市計画の実態を明らかにする。

(3) それにより、日本列島・東アジアにおける都市史の新しい一類型を提示する。

3. 研究の方法

(1) 1,000 件をこえる発掘データやボーリングデータを整理した後、GIS を構築し、時期ごとの立体的な古地形の復元図、古植生・土地利用の復元図を作成した。古植生復元などのためのデータの不足は発掘現場で試料を採集して分析を委託し、取得される遺構データの精度向上のため GPS 測量機器を活用した。

(2) 地質学・植物学・地理学・考古学・日本史学・東洋史学などの計 23 名の研究者により、古環境 GIS チーム (趙・松田・市川・小倉・高橋・辻本・平田)、考古情報チーム (南・田中・京嶋・黒田・佐藤・嶋谷・杉本・積山・寺井・松尾・松本)、文献情報チーム (脇田・大澤・豆谷・古市・村元) を編成し、学際的に 3 方面からのアプローチをおこなった。シリーズ「大阪上町台地から都市を考える」という 7 回のシンポジウムや各種研究会を継続するなどして、脇田を中心に成果を統合した。

4. 研究成果

研究成果の多くは、脇田修他『大阪上町台地の総合的研究』(2014 発表論文の図書) にあり、以下はその摘要である。

(1) 地形・植生復元 (趙・松田・市川・小倉・高橋・辻本・平田)

梶山彦太郎・市原実「大阪平野の発達史」(1972) で発表された河内湾、河内湖の古地理図は、以降 42 年間の大阪平野の歴史研究の基礎となった。この改定を目指し、GIS の枠組みを構築して遺跡や地質の情報を組み入れ (市川創他 2011 雑誌論文)、趙を中心に総合研究の基図を作成した。それらは「上町台地北部と周辺低地の更新統上面等高線図」と 5 葉の古地理図の 1 弥生時代後期、2 古墳時代後期、3 古代 (図 1)、4 中世

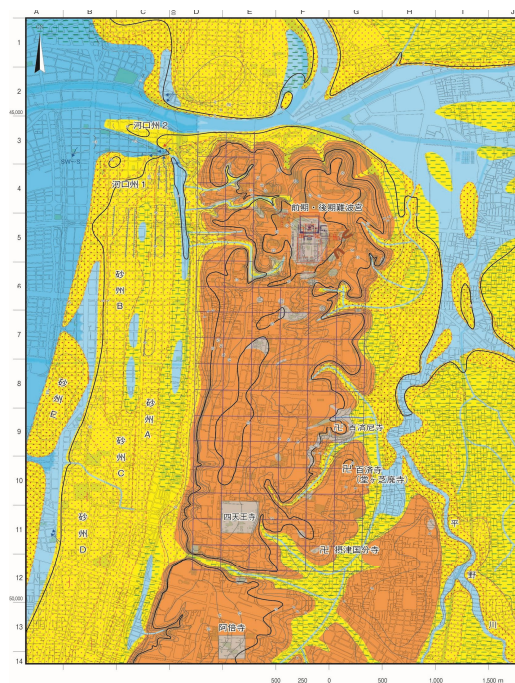


図 1 古地理図 古代



図 2 古植生推定図 古代

後期、5 豊臣時代後期である。

次に古地理図を基に、辻本が、各所での自然科学分析を反映した古植生推定図を作成した。それらは、1 弥生時代後期、2 古墳時代後期、3 古代 (図2) の3葉である。

古地理図には、台地の谷や造成地、低地の砂州や潟湖、集落と道など、従来にはない詳細な地理情報が含まれている。とくに、上町台地に存在した数多くの谷を復元したが、各時期の切り土と谷埋めの状況は、難波京・中世四天王寺・大坂城などの都市計画や中心地の移動をダイナミックに表している。また、難波津などの港湾施設とも関係する難波砂州の形成過程の詳細な復元をおこない、天満砂州 (長柄砂州) の形成には従来と異なる考えを示した。

本研究で示した古地理図等は、今後の上町台地とその周辺のあらゆる歴史研究の土台となるものと自負しており、新しいデータによって適宜修正されていく必要がある。

(2) 都市形成から 難波宮期

難波宮以前の5～7世紀の上町台地北端部を対象に、都市が形作られていく過程を探求した。その成果は、日本列島における都城成立以前の初期都市の形成過程をもっともよく示す事例になると考える。

[大阪湾・河内湖岸の大阪平野]、[上町台地北端とその周辺]、[上町台地北端内部]という三つの異なるレンジで、人口の密集地(集落)、政治的中枢、農業生産地、牧、各種の手工業生産地、余剰生産物の集積地、港湾などの相互関係と動態を追いかけた。杉本は、分散した各種の拠点が舟運のネットワークによって結ばれる河内湖岸の姿を明らかにし、南は、難波屯倉を核に、上町台地北端とそれを支える周辺地域との関係をモデル化して発掘資料と照合した。田中は、新発見の初期須恵器窯である上町谷窯の資料の胎土分析を駆使するなどして、形成段階の都市内部での生産と消費の關係にせまった。これらの研究では、本研究の古地理図と古植生図が力を発揮した。

上町台地の都市形成の原動力である流通・交通を支えるには、港と道があり、京嶋が、難波における5～7世紀の道路の発展段階について予察した。また政治的中枢については古市が、文献史学の立場から大阪湾岸の王宮を分析・評価した。

以上は上町台地という限定された事例だが、佐々木憲一(明治大学)が、世界史的な初期都市の様相と比較することで相対化した。

難波宮期については、積山が、あらためて東アジアの国際的な動乱への対応策として孝徳朝の難波遷都を評価し、黒田が、国際的な緊張下での難波地域の防御システムである羅城と烽について、遺構からせまった。いずれも、外交・対外交渉の拠点となった上町台地の地勢学的位置をよく表わすものと考えられる。

(3) 難波京

難波京の研究は積山により大きくすすめられ(『古代の都城と東アジア 大極殿と難波京』2013 図書)、さらに市川らにより、おもに以下の2点の進展をもたらした。

上町台地は後世の大開発をこうむり、都市の中で調査は断片的である。しかし、GISとGPS測量を組合せ、積山の復元案をもとに溝などの遺構を追い、条坊に合致する事例が蓄積された。本研究により、難波京においてもほかの都城と同様に、条坊遺構について、じゅうぶんに予測を立てて調査できる段階になった。これが成果の1点目である。

2点目に、上町台地では、難波京の都市計画が中世末期まで受け継がれ、維持された場所があることがわかった。溝などの条坊痕跡は、中世まで引き継がれているものが少なく、四天王寺周辺では豊臣期直前まで条坊を踏襲した地割が残っている。そのような地域では、谷の埋め立てもおこなわれている。7～8世紀につくられた都市計画が、はるか後代まで重畳して影響を与えていることは、大阪の都市史に新たな視点をもたらすと考えられる。

以上に加え、村元は中国北朝での現地調査を反映し、難波京と副都制の比較として、中国北齊期の軍事的都市で別都である晋陽と、京師・鄴との関係を考察した。また佐藤は、後期難波宮の研究の基礎資料として、軒瓦の型式番号の改訂をおこなった。

(4) 平安時代

上町台地周辺の平安時代は、難波宮廃絶による衰退と評価されることが多かった。考古資料からは、都市的な繁栄が北の大川沿岸、すなわち国衙周辺と南の四天王寺周辺に分化して継承されたとみられるが、村元は近年の発掘を整理し、これを補強した。

文献史学からは、西本昌弘(関西大学)が、難波では寺院などの拠点が継続すること、平安前期・中期にも淀川ルートが主要航路であったこと、難波駅家などについて論じた。また大村拓生(大阪工業大学)は、8世紀に上町台地周辺に立地していた安曇寺・善源寺・生国魂社・坐摩社などが存続し、さらに渡辺津が重視される12世紀以前にはすでに志宜社・太融寺・天満天神が創建されており、寺社を維持するための人的・物的資源の連続から、都市機能の連続性をも示唆するとみた。

(5) 中世から近世初頭

中世から近世初頭については、年次ごとに宗教都市、港湾都市、城下町をキーワードに、「寺社と中世都市-京都・博多・大坂-」「港湾と中世都市-堺・益田・高松・大坂-」「中世都市から城下町へ」「近世の二大城下町 大坂と江戸」のシンポジウムと、各地の都市遺跡の現地調査を繰り返して研究を進めた。

大澤は、中世後期の交通路と渡辺・天王寺・大坂の三つの都市を素材に、豊臣秀吉の大坂

城下町は、ベースにこれらの個性的な中世都市があり、その秩序が解体され、経済力を利用しつつ連結されることで出来上がったととらえた。これに続いて松尾は、おもに発掘資料から、渡辺・天王寺・大坂寺内町 大坂城下町の誕生(豊臣初期) 城下町の展開(豊臣前期) 巨大城下町への道(豊臣後期) 巨大近世都市としての拡大(徳川期)と発展過程をたどり、街区構成、大名屋敷、町屋などの変遷をみた。

古地理図4(中世後期)・5(豊臣時代後期)は、砂州・河口洲・潟湖・谷などの自然地形を利用しつつ、大きくそれを改変して城や町に取り込んでいく、豊臣期の城下町の造成過程を雄弁にものごとっている。

(6) 江戸時代の産業など

江戸時代はおもに各種の産業を取り上げた。

豆谷は、都市生活に必要な、信仰(寺町) 手工業生産の拠点、行楽地としての江戸時代の上町台地の役割を明らかにし、台地上に土浦藩蔵屋敷があったことを紹介した。大坂の物流に大きな役割を果たした蔵屋敷については、松本が、その代表格である讃岐高松藩蔵屋敷を例に、発掘資料から分析した。

杉本は、『難波丸』の諸職業をデータベース化し、GISを使って元禄期大坂の産業マップを作成した。それらは、1.紙を扱う藩の蔵屋敷と紙蔵元、2.紙の蔵元と紙仲買・問屋、3.紙の仲買と紙を材料とする手工業・紙の再生、4.木問屋・材木・挽板、5.造船関係の諸職業、6.刀関連の諸職業、7.両替商、8.長崎問屋・長崎系割符、9.嗜好品、煎茶問屋・煙草問屋である。これにより、素材・加工・消費・リサイクルといった連関(紙・木材)や、同業者以外の産業的なまとまりによる集住(造船・刀)、金融・貿易センターなどが抽出できた。商工業都市大坂を一つの有機体として可視化する端緒となる研究であろう。

最後に脇田が、大坂で流通した様々な産物、大阪人の思想や信仰、文化的な動きや教育などについて、近世から近現代の大阪へつなげる諸要素について論じた。

(7) (1)~(6)に通底するもの

全時代をとおした都市大阪の原動力は、地勢学的位置にある。弥生時代まではその特徴はじゅうぶんに発揮されないが、古墳時代以降、国家的なまとまりが生まれ始め流通圏が拡大していくにつれ、上町台地が重視され、その圏域が日本列島を越えると対外的な拠点にもなる。大阪の発展の原動力は流通・経済であり、本質的に京都や東京のような都市とは異なっている。ときには、難波宮期・豊臣期のように政治的中枢として、大坂本願寺期のように宗教センターとして活用することもできる。

本研究により、前代の都市計画が後代に利用され重畳して都市が形成されていくようすが見え始めた。一例を挙げると、難波京の

糸坊はある部分で中世末まで維持されている。

また、自然地形・環境は都市計画やインフラの整備と強い関連があることがわかってもらえると思う。それと同時に、古墳時代から難波宮期の植生変化や、豊臣期の宅地の大造成のように、人間が新たな自然環境を作り出し、その影響を受けて都市の新たな生活や社会が生まれる。農山漁村だけでなく、前近代の都市は、まさに自然と人間の相互作用の過程と結果なのである。

本共同研究により、単なるイメージでない、より実証的な大阪の都市形成史を描き出す「基盤」ができたのではないかと考える。

5. 主な発表論文

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(雑誌論文)(計27件)

田中 清美、近畿地方出土の煙突形土製品と渡来人、韓式系土器研究、査読有、13号、2014、213-226

杉本 厚典、難波宮の区画施設 特に複廊について、大阪歴史博物館研究紀要、査読有、12号、2014、31-43

黒田 慶二、織豊期の造瓦の変遷、考古学ジャーナル、査読無、652、2014、20-24
大澤 研一、伏見組に関する一考察、大阪歴史博物館研究紀要、査読有、11号、2013、33-46

大澤 研一、上町台地の中世都市から大坂城下町へ、中世都市研究、査読無、18、2013、85-99

京嶋 覚、古代道路の成立過程、立命館大学考古学論集、査読無、2013、365-376

積山 洋、飛鳥時代難波の宗教環境、都城制研究、査読無、7、2013、19-38
<http://hdl.handle.net/10935/3491>

村元 健一、中国 北朝都城の祭祀空間、都城制研究、査読無、7、2013、39-53

村元 健一、北朝長安の都城史上の位置づけについて、大阪文化財研究所研究紀要、査読有、2013、19-34

大澤 研一、道からみた豊臣初期大坂城下町、大阪歴史博物館研究紀要、査読有、10号、2012、21-32

大澤 研一、戦国期摂河泉における本願寺の地域編成について、市大日本史、査読無、15号、2012、19-42

積山 洋、難波宮・京の廃絶とその後、都城制研究、査読無、2013、51-61
<http://hdl.handle.net/10935/3514>

豆谷 浩之、慶長三年における大坂城下の改造をめぐる、大阪歴史博物館研究紀要、査読有、10号、2012、35-49

田中 清美、金海大成洞古墳群の調査成果と年代観、韓式系土器研究、査読有、12号、2012、29-48

市川 創、松田 順一郎、小倉 徹也、

趙 哲済、辻本 裕也、平田 洋司、古環境と人間活動の関係把握に向けて、大阪文化財研究所研究紀要、査読有、13号、2011、11-38

Hiroshi SEKIYAMA, Changes in the perception of cattle and horses in Japanese ancient society, Coexistence and Cultural Transmission in East Asia, Left Coast Press (米国)、査読有、2011、141~161

積山 洋、中国古代都城の外郭城と里坊の制、歴史研究、査読無、48号、2011、1-28

<http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/25533>

積山 洋、難波京の条坊区画、都城制研究、査読無、5、2011、11-18

<http://hdl.handle.net/10935/3527>

嶋谷 和彦、中世・堺の環濠をめぐる諸問題、中世都市研究、査読無、15、2010、141-161

〔学会発表〕(計48件)

積山 洋、難波宮・難波京研究の新展開、条里制・古代都市研究会第30回大会、2014年3月8日、奈良文化財研究所

市川 創、考古学における情報共有の試み、地理情報システム学会第22回大会、2013年10月26日、慶応義塾大学

Tsukuru, Ichikawa et al., For the understanding of correlation between the palaeoenvironment and human activities: Around the Osaka Uemachi Upland northern part. Kyoto Regional conference of International Geographical Union. 2013年8月7-8日、京都国際会館

田中 清美、近畿地方の百済系渡来人、漢城百済博物館講演会(招待講演)、2013年8月16日、ソウル市漢城百済博物館

趙 哲済、大坂城築城期の盛土中に見つかった変形構造の地震痕跡としての検討、日本地質学会第120年学術大会、2013年9月14-16日、東北大学

Chul-jae CHO, Deformation structures found in fill strata of the early Early Modern Osaka Castle, Japan, The forth International Symposium on Man-Made Strata and Geo-Pollution by Japan branch of IUGS-GEM, 2013年12月1-2日、潮来ホテル(茨城県)

京嶋 覚、大阪市内の7世紀前後の集落と交通、第61回埋蔵文化財研究集会、2012年9月1日、九州歴史資料館

積山 洋、大極殿の展開と後期難波宮、東亜比較都城史研究会、2012年1月8日、山口大学

田中 清美、大阪市出土の鑄型によるガラス小玉の生産と流通、民族芸術学会第28回大会、2012年4月22日、大阪歴史

博物館

趙 哲済、大阪市域の考古遺跡における地震現象とその年代、日本文化財科学会第29回大会、2012年6月23日、京都大学

中条 武司、趙 哲済、大阪平野恵美須遺跡における海浜堆積物と紀州街道の成立、日本第四紀学会2012年大会、2012年8月20日、立正大学熊谷

趙 哲済、中条 武司、辻本 裕也、大阪海岸低地、長柄砂州中部の地形と古環境の変遷、日本地質学会第119年学術大会、2012年9月15日、大阪府立大学

松尾 信裕、中世から近世の町屋の形、関西近世考古学研究会大会、2012年12月2日、大手前大学

嶋谷 和彦、堺環濠都市遺跡とその周辺遺跡における金属製品の生産-鑄物生産を中心に、関西近世考古学研究会第23回大会、2011年12月11日、羽衣国際大学

田中 清美、近畿の渡来人集落、日韓集落研究会第7回共同研究会、2011年8月26-28日、韓国京畿道博物館

田中 清美、上町台地周辺の韓式系土器と5世紀の土器資料、韓式系土器研究会、2011年6月、大阪文化財研究所

趙 哲済、大阪湾岸における古墳時代初頭の地震と津波、地学団体研究会大阪支部2011年度総会、2011年7月10日、大阪市立自然史博物館

趙 哲済、中条 武司、西大阪平野における縄文時代晩期~古墳時代の沿岸環境の変遷、日本堆積学会2011年度大会、2011年12月23日、長崎大学

松田 順一郎、市川 創 他、難波京や大坂城の舞台となった上町台地におけるGISの取り組み、空間情報科学と測量・計測技術を用いた文化財研究、2010年11月26日-2011年1月16日、奈良文化財研究所平城宮跡資料館

〔図書〕(計19件)

脇田 修他、大阪文化財研究所・大阪歴史博物館、大阪上町台地の総合的研究-東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型-、2014、288

積山 洋、清文堂、古代の都城と東アジア-大極殿と難波京-、2013、390

大澤 研一、豆谷 浩之、大阪歴史博物館、天下の城下町 大坂と江戸、2013、143

一瀬 和夫、南 秀雄 他、同成社、古墳時代の研究6 人々の暮らしと社会、2013、251中11

上田 正昭、金 時鐘、京嶋 覚 他、批評社、ニッポン猪飼野ものがたり、2011、367中13

福永 伸哉、趙 哲済 他、同成社、古墳時代の研究8 隣接科学と古墳時代研究、2012、228中12

小野 正敏、五味 文彦、萩原 三雄、

大澤 研一、松尾 信裕 他、高志書院、
中世はどうか変わったか、2010、全体中 52
岩淵 怜治、松尾 信裕 他、吉川弘文
館、史跡で読む日本の歴史 9 江戸の都市
と文化、2010、全体中 34
田中 清美、他、批評社、河内文化のお
もちゃ箱、2009、359 中 15

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://osaka-uemachi.sakura.ne.jp/>

(2014 年 7 月末まで)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

脇田 修 (WAKITA, Osamu)

公益財団法人大阪市博物館協会(大阪文化
財研究所、大阪歴史博物館、大阪市立美術
館、大阪市立東洋陶磁美術館)・大阪文化
財研究所・会長

研究者番号：5 0 0 2 7 9 6 8

(2) 研究分担者

田中 清美 (TANAKA, Kiyomi)

同上・大阪文化財研究所・総括研究員

研究者番号：1 0 3 4 4 3 6 8

趙 哲済 (CHO, Chul-jae)

同上・大阪文化財研究所・総括研究員

研究者番号：2 0 3 4 4 3 6 9

南 秀雄 (MINAMI, Hideo)

同上・大阪文化財研究所・所長

研究者番号：7 0 3 4 4 3 8 0

(3) 連携研究者

平田 洋司 (HIRATA, Yoji)

同上・大阪文化財研究所・事業係長

研究者番号：8 0 3 4 4 3 7 3

市川 創 (ICHIKAWA, Tsukuru)

同上・大阪文化財研究所・学芸員

研究者番号：8 0 3 7 2 1 3 4

小倉 徹也 (OGURA, Tetsuya)

同上・大阪文化財研究所・学芸員

研究者番号：8 0 3 4 4 3 5 7

高橋 工 (TAKAHASHI, Takumi)

同上・大阪文化財研究所・調査課長

研究者番号：3 4 4 3 6 7

杉本 厚典 (SUGIMOTO, Atsunori)

同上・大阪歴史博物館・学芸員

研究者番号：7 0 3 4 4 3 6 4

京嶋 覚 (KYOSHIMA, Satoru)

同上・大阪文化財研究所・総括研究員

研究者番号：3 4 4 3 5 9

積山 洋 (SEKIYAMA, Hiroshi)

同上・大阪文化財研究所・普及係長

研究者番号：8 0 3 4 4 3 6 5

松本 百合子 (MATSUMOTO, Yuriko)

同上・大阪歴史博物館・企画広報係長

研究者番号：3 0 3 4 4 3 7 8

黒田 慶一 (KURODA, Kei-ichi)

同上・大阪文化財研究所・主任学芸員

研究者番号：3 0 3 4 4 3 6 0

寺井 誠 (TERAI, Makoto)

同上・大阪歴史博物館・主任学芸員

研究者番号：6 0 3 4 4 3 7 1

松尾 信裕 (MATSUO, Nobuhiro)

同上・大阪歴史博物館・研究主幹

研究者番号：1 0 3 4 4 3 7 6

大澤 研一 (OSAWA, Ken-ichi)

同上・大阪歴史博物館・企画広報課長

研究者番号：4 0 1 9 1 9 3 6

豆谷 浩之 (MAMETANI, Hiroyuki)

同上・大阪歴史博物館・学芸課長代理

研究者番号：4 0 3 4 4 3 7 9

村元 健一 (MURAMOTO, Ken-ichi)

同上・大阪歴史博物館・学芸員

研究者番号：9 0 3 4 4 3 8 2

古市 晃 (FURUICHI, Akira)

神戸大学・文学部・准教授

研究者番号：0 0 3 4 4 3 7 5

(4) 研究協力者

佐藤 隆 (SATO, Takashi)

大阪市・教育委員会事務局・主任学芸員

松田 順一郎 (MATSUDA, Jun-ichiro)

鴻池新田会所・副館長

辻本 裕也 (TSUJIMOTO, Yuya)

パリノ・サーヴェイ(株)・大阪支店長

嶋谷 和彦 (SHIMATANI, Kazuhiko)

堺市・文化観光局・学芸員